加藤学園　野田北部幼稚園 2023 年度 園としての自己評価

公開保育実施日：令和6年1月23日（火）
評価者：田中 卓也先生（育英大学）/同伴者：伊藤 伸之（園長）

園舎の建て替えや2年後のこども園化に伴い、【職員の働き方の改革】、再度の【保育方針や内容、取り組み、行事の見直し】を進め始めたところである。

【2023年度、幼稚園で取り組んできたこと】

【職員の働き方について】

・保育業界の実態として、一般企業では当たり前の権利が保障されにくい部分があったり、園独自の決まりの上で職員が働いてきた側面があった。働く側の権利の保障や、より働きやすい職場、職員が長く働き続けていけるような職場を目指し、専門企業に入ってもらいながら以下の制度の改善、見直しを始めた。
①業務改善（仕事の仕分け、振り分け・勤務制度、休暇制度の明確化・ITC化等）
②人事制度を整える（キャリアUP、DOWN・必要人員の補充、配置等）
③法人３園の制度整理と連携

・職員の役割、仕事の仕分け、振り分けをすることで、担任は担任業務に、バス添乗職員はバス添乗に等、それぞれが担当分野に集中して業務を進めることが出来るようになった。
また、人員の補充により職員の休憩時間の確保ができるようになり、集中して業務に向き合えるようにもなっている。

【保育方針や内容、取り組み、行事の見直しについて】

●バス安全点検

・ニュースで相次いだ、幼児バス降ろし忘れ事件に際し、バス降ろし忘れ防止安全装置設置の義務化に伴い、バス3台に幼児降ろし忘れ安全装置を設置。運転手には毎朝のアルコールチェックを義務付け、運転手と添乗員が記入するチェック項目も増やした。

●保育室環境の見直し

◆2歳児遊びの環境作成

・2歳児は、身の回りの様々な環境に刺激を受けながら、興味関心の種をまいていくのに大切な時期であると考えている。２歳児保育者が主となり、安心且つ安全に遊べるような環境の見直しと、振り返りと考察を繰り返し、子どもたちの姿に合わせた遊びの環境設置を積極的におこなっていた。

（例①）・保育室近くに水路を掘って水、泥遊びが楽しめるような工夫

→地面に座り込み、水や泥の感触を楽しみながら泥だらけになって遊びこむ姿が見られた。遊びを軸に、保育者と安心した関係が築けたり、何よりも子どもたち自身の気持ちの安定と開放に繋がっていく様子が感じられた。

（例②）・2歳児共同スペースの工夫
→遊びに飽きた頃や子どもたちの動き、遊び方に合わせて環境を見直すことで、また新鮮な気持ちで遊べるようになった。コーナーを区切ったことで、おもちゃの散らばりが減ったり、子どもたちにとっても遊ぶ場所が明確化され遊びの混在が減っていったように感じる。また、人形用のベットを作ったことで、お料理作りだけではなく、より家庭的な遊びへと発展していく様子が見られるようになった。
→おもちゃの量を調整したり、片付けの箱を大きくすることで片付けがしやすくなり、子ども自身で片付けがしやすくなっていった。「子ども自らできる！」環境は生活力の土台にもなっていくので、大事なことだと感じる

◆新園舎1階保育室にロフト＆保育者棚（収納スペース）の作成
・４歳児クラスにロフトと収納スペースを作成。保育室内におけるコーナー遊びの空間の保障と遊びの充実を目的として、保育者と有志による保護者とが手作りで作成したものである。
　空間が仕切られることで遊びの混在が減り、ゴチャゴチャすることなく遊べるようになったり、他の遊びに邪魔されることなく、じっくりと遊べるようにもなっている。また、片付けの際にそのまま保管できるようになり、遊びが継続的に保障されるようになている。
　加えて、夏場の高気温により戸外遊びが減ってしまっているという現状において、室内遊びの広がりにもなっているように感じる。
・ロフトには空間区別の他に、「登る」という遊びの要素も含まれていて、子どもたちの遊びの欲求を掻き立てる場にもなっている。「登れるようになりたい。」という意欲を持って継続的に挑戦する姿が見られたり、「よじ登る」「掴む」「力を入れる」等、身体機能の向上にも繋がっているように感じる。また、高さがあることで「落ちないように気を付けよう。」と、注意力を働かせる効果も期待できる。
・鉄製遊具ではなく、木製で作成した意図としては、万が一の時に大きな怪我に繋がりにくいという点と、子どもの遊び方によって解体したり、増設しやすいという利点があるからである。

【課題点】
・遊びの環境設定の課題としては、子どもの姿をベースにどんな環境を構成していくかを職員間同士で対話をしながらイメージを共有していくことが必要だと感じる。「どんな物、どんなサイズの物を設置していくのか？」を話し合いながら作成していくことが大事になってくるように感じる。

◆行事や取り組みの見直し
　・一斉保育から子どもたちと大人とが話し合ってつくっていく生活へとシフト変更をしてきているのだが、園行事自体は今まで通り続けてきているものも多く矛盾が生じてきてしまっている。
　行事も【子どもたちの生活をベースに】【親子で楽しめる】という考えの元で変換期を迎えているが、変換期ゆえに園と保護者の方々との思いがずれてしまったり、職員間でも方針の共有や考え方の切り替えも不十分な部分が多く、混乱、困惑している状況にある。
　【子どもたち、保護者、職員にとって何が幸せな行事の在り方なのか？】を考え直し、園の思いを保護者の方々や職員に繰り返し伝え、理解してもらうことが必要であると強く感じている。

【公開保育を経て、田中先生からの評価について】

●特に評価できる点

・子どもの主体性の尊重とそれに基づいた保育の取り組みの努力
・クラスの壁面の構成の工夫がなされていた。
・園舎の建て替えが行われる中で、限られた園児の遊びのスペースを有効活用している。
（ロフトを新設していた☛園長先生を始め、保護者との連携で製作した点の評価）
・一人ひとりの園児に寄り添った保育が展開されていた。
・子どもの発達ならびに興味や関心に合致した活動や遊びが展開されるよう工夫がなされていた。

●改善が求められる点

・保育者間のこまかな連携
・室外の安全への配慮
・ヒヤリハットへの対応、保育者間のさらなる共有意識を持つ、安全な保育の共有など
・保護者に対し、子育ての楽しさを伝えることができ、共有できるような、さらなる関係の構築
・異年齢との連携
・就学にむけての、学校との連携（スタートカリキュラム）
・言葉の獲得のための方策
・子どもたちが何度も何度も行えるような環境づくり（の設定）
・子どもが夢中になるだけの遊びへのいざない

【田中先生からの改善点を受けて、幼稚園で対応していくこと】

◆保育者間のこまかな連携について

→2022年度からのZERO利用により、保育中の職員間での連携、子どもたちの把握はしやすくはなっている。が、クラスによっては補助教諭が入っているクラスもあるので、補助教諭への声掛けと連携は必須であると感じている。時間で退勤してしまう補助教諭も多いので、学期に１回を目安に学年で話ができる日を設けたり、担任、補助教諭という垣根を越え、互いに意見しやすい関係性を築いていくことが大切である。
→異年齢交流、連携は、現状としてはなかなか取れていない状況ではあるが、新園舎の完成と共に、クラス配置を異年齢混合配置にし、異年齢の姿を間近に感じたり、交流が持てるような配置へと改善を考えている。

◆室外の安全への配慮、ヒヤリハットへの対応、保育者間のさらなる共有意識を持つ、安全な保育の共有などについて

→園舎建て替え工事に伴い、板の囲塀が設置され死角が生まれたり、園庭の見通しが悪くなってしまっている。実際に曲がり角で正面衝突が起きてしまったこともあり、カラーコーンやミラー、電灯を設置したり、鉄の棒にクッション材を巻く等の安全対策をおこなった。
→工事残土から石等も出てきてしまっているので、その都度や、月1回の安全点検を通して危険物の排除を続けていきたい。
→園庭から築山にかけての見通しが悪くなってしまっているので、園庭と築山周辺には必ず職員が付くよう徹底していく。
→お昼寝の際のブレスチェックやうつぶせ寝について、AEDやエピペン、アレルギー研修をおこない、職員の安全意識や対策意識を高めていくことが必要である。

◆保護者に対し、子育ての楽しさを伝えることができ、共有できるような、さらなる関係の構築について
→保育の変換期でもあり、保護者への更なる理解を求めるためにも、園からの発信は重要であると感じている。工事の進捗状況であったり、保育の考え方や行事の変更があった際には、早め且つ細やかな説明が必要となってくるであろう。１年に２回設けていた「対話の会」を年３回に増やしたり、園としての考え方をより配信、掲示していく等の工夫を検討中である。
→クラス活動については、週１回のおうちえん配信と、最低２週間に１回のドキュメンテーション配信を、最低週１回以上の配信へと変更し、一層の保護者理解へとつなげていくようにする。
→0，1歳児保育「まんま～る」の日程増設、保育環境を保護者を巻き込みながら変化させていく等、保護者や地域の方を巻き込みながら、一層地域に根付いた園運営を進めていくようにする。

◆言葉の獲得のための方策
→ワークを使っての文字練習を取りやめ、言葉や文字に触れることを楽しめるような体験を工夫し、日常の生活に取り入れているところである。「先ずは先生や友だちとお話ししたい。」「文字を読んでみたい。」「文字を書いてみたい。」という意欲を膨らませていくことを大事に捉えている。
（例）言葉遊び・文字遊び・なぞなぞクイズ・サイン帳遊び等

◆就学にむけての、学校との連携（スタートカリキュラム）
→学校との連携に関しては、年2回の職員間連絡会、年１回の子ども同士の交流会、その計画と振り返り、年度末の就学前連絡会がおこなわれているが、正直、連携の足りなさは感じている。
　学校と園との職員が共に研修に参加できるような機会が設けられないか？？話し合えるような時間が確保できないのか？？互いの行事に参加しあえたり、休み時間を利用させてもらいながら、子どもたち同士の関わりが増やせないかと、市や学校側に提案している段階である。

◆子どもが夢中になるだけの遊びへのいざない
→子どもたちは、「今の自分よりも、もっとレベルUPしていきたい。」という気持ちを持っている。子どもたちの意欲は遊びの継続にも繋がっていくので、子どもたちの心情や時期に合った言葉かけや、適切な働きかけ、援助が必要だと感じている。そのためには、子どもたちの「今」を見つめ、タイミングを見極めていくことが必要であると感じている。保育者自身の資質向上や子どもたちを見ていく視点の在り方も課題の一つである。